

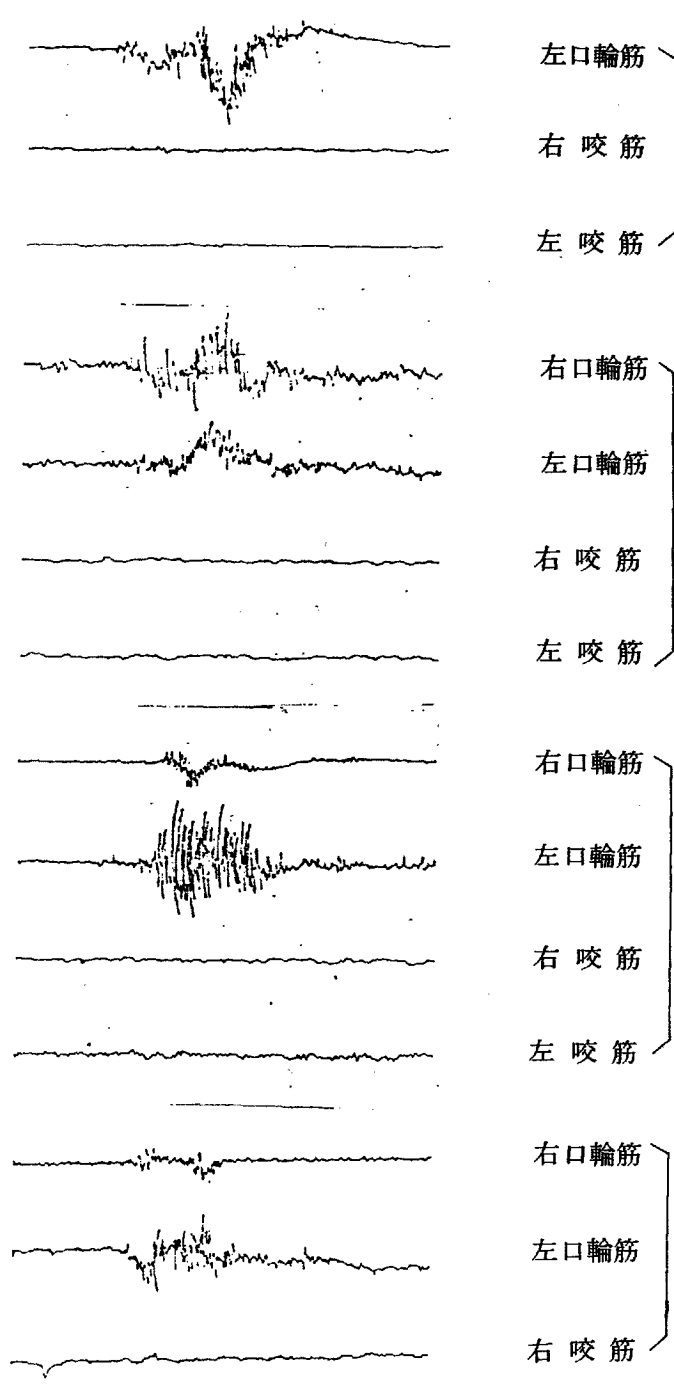
唇顎口蓋裂患者における咀嚼障害に対する 筋電図学的アプローチ

東京医科歯科大学歯学部 三浦不二夫

唇顎口蓋裂患者においては、上顎前歯の舌側傾斜が著しい場合が多く、それが上顎骨の劣成長と相俟って顕著な反対咬合をひきおこし、咀嚼障害の原因となっている。この上顎前歯の舌側傾斜は、口唇形成術後の癒痕による上口唇の緊張と何らかの関係があることが示唆されている上、反対咬合の著しい程咀嚼障害は大きいと考えられる。

そこで本研究では、10～11歳の矯正治療前の片側性唇顎口蓋裂患者5名において、口輪筋、咬筋の筋電図学的検索を行ない、唇顎裂をもたない同年齢の対照群2名と比較した。また合わせて、咬合力計により臼歯部における咬合力を測定した。その結果、①1秒で習慣性閉閉運動を行なわせた時、対照群では咬筋にのみ筋活動がみられ、口輪筋は活動しないのに比し、唇顎口蓋裂群では口輪筋にも筋活動がみとめられた。また、反対咬合が著しい症例では、口輪筋は咬合時以外でも接続した活動を示した。②発音させた時、反対咬合が著しい症例で、発音の前後に接続した筋活動が認められた。③臼歯部における咬合力は、唇顎口蓋裂群と対照群との間に差は認められなかった。

以上より、唇顎口蓋裂患者においては、対照群ではみられないような口輪筋の活動があり、反対咬合が著しい症例ほどその傾向が強いことが分かった。



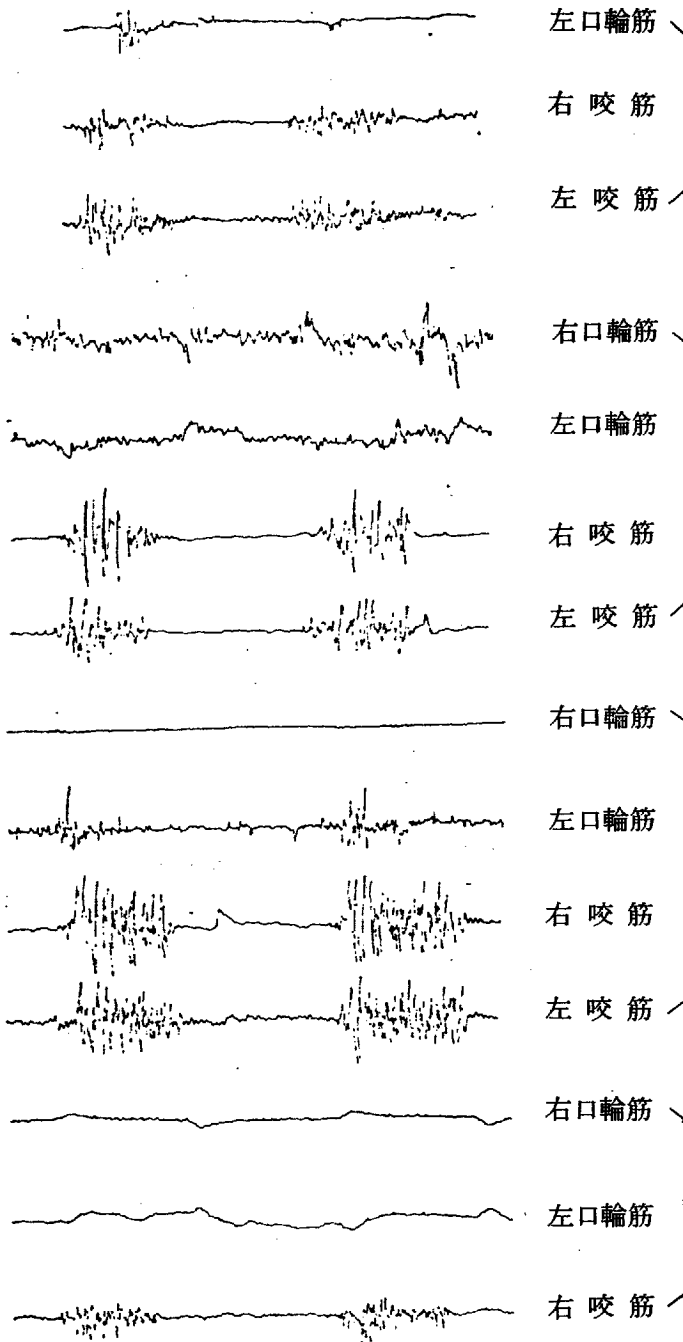
症例1：
左側唇顎口蓋裂

“む”発音時における筋電図

症例2：
左側唇顎口蓋裂

症例3：
右側唇顎口蓋裂

症例4：
対照群



症例1：
左側唇顎口蓋裂

0.1秒の
習慣性開閉運動
における筋電図

症例2：
左側唇顎口蓋裂
反対咬合の著し
い症例

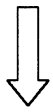
症例3：
右側唇顎口蓋裂

症例4：
対照群

100mV



検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



唇顎口蓋裂患者においては、上顎前歯の舌側傾斜が著しい場合が多く、それが上顎骨の劣成長と相俟って顕著な反対咬合をひきおこし、咀嚼障害の原因となっている。この上顎前歯の舌側傾斜は、口唇形成術後の癒痕による上口唇の緊張と何らかの関係があることが示唆されている上、反対咬合の著しい程咀嚼障害は大きいと考えられる。